

風の祭祀の展開と景観

田上 善夫

Regional deployment of wind festival and landscape

Yoshio TAGAMI

E-mail: tagami@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：風祭, 風災害, 風神, 日本列島

keywords: wind festival, wind disaster, god of wind, Japanese Islands

I はじめに

祭祀と景観

風の祭祀は、古くから各地でさまざまに行われてきた(田上, 2010)。その祭神, 聖地, 拝所, 祭日, 崇敬人などは、とくにその祭られる地により、一定のまとまりが認められる。このことは風に含まれる意味が、地域と深くかかわりをもつことを示していると、考えられる。

風の祭祀の行われる地は、その地形, 神社, 寺院宗派などに特色がある。たとえば、地形的には新田が開発された扇状地であったり、谷や丘や山林の広がる地であったりする。そこで行われる祭りは、土地や歴史を背景とする風土の所産とみることができる。

とくに土地を基本とした景観とのかかわりは強く、祭祀はその土地との有機的なかかわりを有している。中央日本には典型的な風の祭祀がみられる一方、西日本にもやや異なる風の祭祀があり、多様な風祭の特色にも、それと結びつく景観の存在が理解される。祭りは生産とかかわり、農山漁村ごとに特色がある。さらに風は局地性が高いため、地域ごとに特有の風が認知され、祀ること、鎮めることへの共通認識が形成されやすいと考えられる。すなわち海, 平, 原, 山などのような日本列島の典型的な景観と、風の祭祀のかかわりが明らかになれば、その理解も容易になると考えられる。なおここでの景観は、風土のもつ精神的影響に加え、経済, 物理的影響などを含めた有機的な結合を考える。

社寺のような施設も時代により移り変わるが、祭りのような行事習慣は、さらに変化しやすい。祭りでは神職らによる神事に、民衆の奉納行事が続く。

神事以上に奉納行事は多彩であるが、とくに定めもなければ所によりさまざま、時とともに変わっていく。近年では、高齢化や獣害などで耕作放棄地が増えるようになった。五穀豊穡は多くの祭りの願いの一つであったが、農耕が行われなくなると、祭りにも影響を与える。各地の祭りは明治以前の藩政期においても度々の禁止令が出されるが、「祭り」の意味するものは現在とはかなり異なっていたものと考えられる。ただし、ねぶた, 御柱祭, 阿波踊り等々のように、祭りはその地域一帯で大小さまざまに行われており、為政者による影響は限定的で、基本的部分、すなわち景観にかかわるところは時代を超えて受け継がれると考えられる。

これは地域により、景観が伝統的に継承されることにも現れている。山村の中には現在も焼畑農耕を基本とするところがある。平野部では高度経済成長を期に農業の機械化・大規模化が進められたが、山地斜面などで必要とされる技術は平地のそれとは異なり、山地では平野部とは異なる形で森や畑が共存する。生産を介して土地が地域のありかたにかかわり、そこに伝統的景観を継続させることになる。

現在の風の祭祀

風の祭祀は大きく、山口県を含む北九州, 奈良・三重を中心とする近畿, 北信越, 伊豆を含む関東, 東北地方南部に多い。南九州, 四国, 南近畿, 北東北には少ない。

風の祭祀には、さまざまな名称があるが、北九州では風鎮祭が広く分布する。玄界灘で風止祭, 周防灘や有明海で風除祭, さらに南では風神祭, 風祭となる。近畿では、奈良盆地東部から笠置山地では風願濟祭といわれる。さらに東の上野盆地から伊勢平

野では除風祭といわれる。北陸では能登半島東部で風神祭とよばれるが、多くは風祭である。長野では地域的に風神祭、風鎮祭とよばれるが、広く風祭とよばれる。関東でも多くは風祭で、大山、赤城山などの山麓では風神祭とよぶところがみられる。東北南部でも多くは風祭で、会津や朝日山麓など局地的に風神祭とよばれる(図1)。

このように風の祭祀にはさまざまな名称があるが、最も多いのは風祭で、かつ全国に分布するため、以下では風祭を風の祭祀の総称として用いることにする。風祭の斎行の日は、北部九州では、8月末から9月始である。ただし九重山から玖珠川から筑紫平野にかけては、7月に行われる。阿蘇山周辺では8月に行われる。近畿では風願濟祭、風祭の地域では8月末から9月始であるが、除風祭の地域では12月末である。北陸も8月末から9月始であるが、富山では6月に行われる。長野では多くが8月末である。ただし水内では9月始となる。関東周辺でも8月末から9月始であるが、伊豆や房総南部では7月、埼玉県北部では7月、群馬県南部では2月に行われている。東北では8月末から9月始であるが、庄内平野では7月も多くなっている(図2)。

風祭の社で祀られる神は、応神天皇、健甕名方命、天照皇太神、菅原道真が多いが、さまざまな神が祀られる。これには合祀の影響も考えられる。北九州では九重山から筑紫平野にかけて菅原道真が多い。応神天皇と神功皇后・仲哀天皇は山口県で圧倒的である。級長津彦命は限られる。ただし、大宰府周辺で菅原道真が多いわけではなく、宇佐周辺で応神天皇が多いわけではない。近畿では素戔鳴尊と天照皇大神およびその子神の天忍穗耳命が多い。北陸では、伊弉諾尊・伊弉那美尊、素戔鳴尊、健甕名方命が多い。長野ではきわめて健甕名方命が多い。関東では、日本武命、大己貴命をはじめとして、素戔鳴尊、大山祇神などが多い。東北南部ではさまざまな神が祀られる(図3)。

II 風の祭祀と海・平

1. 豊後の風除け

風祭は山口156、福岡167、大分112と周防灘沿岸にきわめて多い。周辺では広島13、愛媛28、宮崎3となる。ただし、熊本、佐賀、長崎の有明海周辺にも多い。

応利山風除大権現

大分県北部の宇佐駅の東方に、応利山報恩寺がある。仁聞菩薩が、養老二(718)年に開基したと伝わる。宇佐八幡の神託で神功皇后追福のため、千手観音を祀る。最澄により天台宗となる。応利山は大折山ともいい、六郷満山霊場第一番札所でもある。同霊場には、国東半島の観音10、不動7、阿弥陀6などを祀る三十三所と番外の宇佐神宮がある。六郷満山と総称される天台宗寺院は、宇佐神宮の八幡信仰とも結びついている。

応利山では、幅広の石段が山頂に向けて続く。山門も鳥居もない。山内には、津波戸山水月寺の跡がある。頂上に近い参道の一对の仁王尊石像には、享保十四(1729)年と彫られる。手足の指は5本ある。その奥に祀られる風除大権現は、主風あるいは風袋とも書かれる。この風除大権現、主風大菩薩自体は石像がない(図4)。

この仁王の意匠は、風天、風神に類似している。さらに六郷山の各地にも類似するものがみられる。胎蔵寺、金宗院、長安寺、霊仙寺、岩戸寺、両子寺の石像はとくに、風神に類似している。真木大堂、旧千燈寺跡、安国寺、宝陀寺の石像も、やや類似するが、風袋かあるいは羽衣のようにみえる。文殊仙寺の仁王は、多少類似する。

仁王とは、二十八部衆の那羅延堅固と密迹金剛の一对とされる。こうした背後にかけられる衣様のものは、迦楼羅炎といわれ、迦楼羅が羽を広げた、あるいは迦楼羅が吐く炎の状態を表し、不動明王などの火炎光背とされる。上述のようにこの周辺の仁王像の場合、迦楼羅炎とは大きく異なっている。

こうした石仏が多いことは、国東半島周辺での特色である。また六郷山の社寺は、宇佐八幡に強くかわる。八幡神は、宇佐宮奥の御許山の神であったといわれる。御許山、大元神社は、奈良の龍田大社の奥に山の神が鎮まるのに似る。付近に山岳信仰の山である九六位山、御許山、求菩提山、英彦山などが、連続している。聖地としての山々と、拝所としての社の関係がある。

このように八幡社などで風祭が行われ、風除権現が祀られる。諏訪であれば明神であるから、これらは諏訪とは異なり、八幡一権現系の風祭である。

2. 防長の風鎮と海防

王司員光八幡宮

下関の15km北東方に、王司がある。おうじは、応神にちなむかもしれない。その員光八幡宮は、仲哀天皇、応神天皇、神宮皇后を祭る。貞観三(861)年に山田八幡宮が創建され、貞観六(864)年に合祀し創建された。貞観の大津波の5年前である。

現在境内に祀られる荒神は、後に合祀されたもので、風鎮祭は荒神の祭りではないという。風は響灘の方から吹く。風鎮祭は規模が小さい。祭日は二十日だが、近年は土日が祭日となる。神事は籤で選ばれる。海から汲んだ潮は竹筒に入れられる。車で回るので、そう遠くない。子供らの祀りもある。祭は長府の忌宮神社いみのみやと似る。多くの神社で同じ祭りがある。

同社の風鎮祭は、風よけ祭ともいう。行事を籤で決める。潮廻りは、潮くみ、七浦廻りともいわれ、綾羅木、垢田、武久、伊崎、壇の浦、御舟手、琴の浦を巡って七本の竹筒に潮水を汲み、持ち帰って神前に供える。御神幸は、神輿を奉戴して鉦太鼓を打ち鳴らしながら、部落ごとの御旅所で神事をいとのみ、一日かけて廻る。幟舞は、男は幟のぼりまい、女は切籠きりこを持ち、境内の土俵を中心に鉦や太鼓に合わせて踊りながら廻る。長府忌宮神社いみのみやの数方庭すほうていの行事に似る。かつては角力、芝居、宮籠り、御神樂も行われていた(前川光徳、1987)。

この8月24日の風鎮祭に先立つ7月20日の夏越祭で御神籤が引かれる。神官が神楽札と白札を用意し、総代が御神幸、百度の祓、七浦潮汲み廻り、幟舞、子ども相撲、百味恩食などから3つを用意する。百度祓は三宝に載せた百枚の榊葉を、祝詞をあげて他の三宝に移す。百味恩食は百種の供物を供える。なお隣接する清末藩城下では別の祭りがされる(湯川洋司、1992)。

王司員光地区は古代の山陽道が通る。吉田・小月から長府に通じる峠の麓である。民芸品の風車が作られているが、1920年生まれの方が、幼い頃祖父に教わった作り方による(王司まちづくりの会、2000)。山口県では、玖珂郡のふぐ提灯が風よけの祈りの火とされたという。また佐波郡では、風押さえに、鎌がつけられた。

室積杵崎神社

光市室積半島の峨眉山にある杵崎神社は、級長津彦命、級長戸辺命、大伴連狭手彦を祀る。昔は亀崎神社といった。欽明天皇二十三(562)年、大將軍大伴連狭手彦が新羅征伐の途次に大しけに会い、

風神に祈請すると峨眉山から霊光が輝き、霊亀が兵船を御手洗湾に導いたと伝わる(図5)。

海岸にある普賢寺は、寛弘三(1006)年に書写山の性空上人により創建された。海中より出現の霊像を祭る。正面に普賢堂、伽藍に隣接して臨済宗普賢禅寺がある。また室積象鼻ヶ岬には八十八ヶ所霊場があり、普賢寺に隣接して始まり、象鼻ヶ岬先端の大師堂まで、10mほどの間隔で石仏が安置される。

早長八幡宮

この杵崎神社周辺には多くの風祭がみられる。早長八幡宮は室積の半島付根に位置し、応神天皇、神功皇后、宗像三神を祀る。文安元(1444)年に宇佐より勧請された。9月4日に風鎮祭が行われる。

麻郷高松八幡宮

杵崎神社の5km東方にあり、応神天皇、神功皇后、仲哀天皇、比咩大神、天照皇大御神を祭る。仁和三(887)年宇佐より勧請された。8月4日に風鎮祭がある。また、石城山とも表示される。この高松山は、神奈備山である。

柳井代田八幡宮

杵崎神社の15km東方、柳井の港に近く、天長十(833)年に創建された。宇佐より勧請されたと伝わる。風鎮祭が8月下旬に行われる。

新庄土穂石八幡宮

柳井の港から西に入った町中にある。風鎮祭が9月上旬に行われる。

塩田石城神社

室積と柳井の間の石城山、鶴ヶ峰(358m)の山頂付近の平地に、大山祇神、雷神、高麗神たかおかみが祀られる。敏達天皇三(574)年の鎮座と伝わる。貞観九(867)年には、三代実録に記されるといい、式内社である。田布施町、光市の大和や室積の郷社であった。明治までは三社権現といわれた。ここでは7月下旬に風鎮祭が行われる。

境内周辺にあたる神籠石こうごいしは、総延長2,534mである。神籠石は、福岡県高良山で初めてみつきり、九州北部から瀬戸内海にかけて14ヶ所が明らかにされている。山城の土塁の基底部にあたり、門址がある。境内の神護寺には、慶応元(1865)年に第二奇兵隊本陣が置かれた跡があり、要害の地である(図6)。

八代二所神社

杵崎神社の北方20kmの八代では、延文二(1357)年、上市桑原に農神、天照大御神、豊受大御神を祀

る想民堂があった。永享二(1430)年、石城神社の大山祇神、高麗神を勧請した。永享十一(1439)に、現在の亀伏山に遷宮した。その二所神社では8月下旬に風鎮祭が行われる。

3. 近江の風と息吹

草津市の志那町、志那中町にそれぞれ1kmほど離れて三大神社、志那神社、惣社神社がある。志那の名は、比叡山から見ると、三つの神社が品の字に見えるからともいわれる。これらの三社では現在、同じ5月3日に祭りがある。

三大神社

志那町の三大神社は、瑞垣内に本殿、若宮社、蛭子社が並び、瑞垣外に稲荷社が祀られる。なお門前には浄土宗西迎寺がある。天智四(665)年に、中臣金連が志那津彦命、志那津姫命を祀り、応徳元(1084)年に大宅主命おおやけぬしのみことを祀ったといわれる。式内の意布岐神社とされる。三大は叡山の三大権現に擬されている。境内の老藤は、天武天皇の勅で倉橋山から移植されたという。宮司は草津の立木神社が兼務する。

5月3日が例祭で、サンヤレ踊りがある。2011年には、12時30分に春祭りが開始され、以下のように進んだ。1) 藤棚の傍で神事、祓詞があげられる。青白の幕が張られる。神職は宮司一人のみである。2) 竿のついた函で、神饌が運ばれる。大宮で神事があり、祝詞では東日本大震災にもふれられる。3) さんやれ踊りが奉納される。神社の紋に鳥がつく。笛、太鼓、舞手の全員が少年である。4) 拝殿あるいは神楽殿に安置されていた神輿が、鉾のついた幡を先頭に渡御する。ワッショイのかけ声とともに、神輿が渡御する。三大神社御旅所では、砂が円錐状に盛られる(図7)。

志那神社

志那町の志那神社は、志那津彦命、伊咲戸主命いぶきとぬしのみことを祀る。伊吹里に鎮座し、式内の意夫伎神社と伝わる。北側に志那の浜が続き、意布岐神の鎮守之碑が建立されている。平安時代にはすでに、社殿があったと考えられている。摂社に白山神社がある。

風の神として琵琶湖上の安全、五穀豊穰を祈願する。四月初めの戌の日が祭礼で、馬が奉納された。団扇二つで豊年満作のサンヤレ踊り、風神踊りがされる。

2011年の祭りでも、浜の志那神社御旅所に神輿

が渡御する。すぐ裏にある池は、かつては琵琶湖の入江であったかもしれない。志那街道が、志那港から守山今宿まで7km続く。民家でも門口に、砂を円錐状に盛る。神輿の渡御では神輿を激しく揺らす。サンヤレ踊りの3枚の扇には白、山、社の文字が書かれる。神社の紋は、鳥が3羽である(図8)。

惣社神社

志那中町に、惣社神社そうしやが鎮座する。この地は吹気といわれ、志那津彦命、志那津姫命を祀る。天智四(665)年に、右大臣中臣金連かねのむらじが勅を承けて風神を鎮祭し、意布岐神と尊崇する。4月24日の例大祭で、風招という大団扇を持ち、三奏の神歌とともに、天をあおいでの風神踊がされる。

白鳳四(675)年、天武帝勅願の科戸山大般若寺が創建される。勅願寺の神宮寺より、惣社の神奈備に藤を供える。神宮寺は御旅所である。科戸明神、式内名神とされる。科戸ヶ浦ともいわれる。付近に大峯山の行者堂、浄土宗浄運寺がある。

2011年の祭りでは、他の2社とほとんど同じころに進行する。缶ビールが振る舞われてにぎやかに、やや遅くまで行われる。祭りでは巫女とは異なる女性神職が行う。甲冑を着た武者が二人加わる(図9)。

神社では藤がかかわる。創建は中臣氏が藤原姓を賜う天智八(669)年の前であるが、蛇一水とのかかわりが考えられる。祭りはその開花の頃となる。ただし、2011年には開花は遅れた。

さんやれ踊り、さんやれ祭りは、滋賀や京都にみられ、田の神・山の神、神送り、風流、の面などが指摘されている。これら3社の祭りではとくに大きな扇が用いられる。祭神が風神であり、息吹で霧を散らす、風の神を送る、などにこの祭が始まるかもしれない。

志那の字は古事記に記されるが、沼田順義のりよし(1792-1850年)は古事記を考究して『級長戸風』を著した(沼田順義, 1969)。ここでは科戸風、科長戸風とも書かれている。シナツヒコ、シナトベの神に対して、志那と科戸はよく対応する。

風神は、野分や二百十日のように強風につながる一方、野山の風、湖水・田園の風のように、順風を表すことも多い。荒魂と和魂のように二面性があり、星、火や日、水、地を祭る際も同様である。

この付近では、661年に唐の俘虜106人を栗太郡に、665年に百済の百姓400余人を神崎郡などに、669年に百済の帰化人700余人を蒲生郡に移住させ

る(水口町史編纂委員会, 1959)。志那津彦命が祀られる665年の前後であり、地域開発につながる事が考えられる。

III 風の祭祀と原・山

1. 諏訪のはらやまさい

上社御射山祭

諏訪大社の上社御射山社は、諏訪郡富士見町、原村と茅野市の境、高度約1,000mの地にある。2010年には8月27日に、穂屋祭りがされた。御射山社から大^{おおよつみ}四^{ほしゅ}御廬社に、さらに浅間社、三輪社、西宮社などを廻る。境内ではなお、御射山社弓道大会が行われる。二歳児の厄除けに、泥鰯流しが行われる。なお、境内にあった会津松は枯死してしまった。

下社御射山祭

下社の旧御射山神社は、諏訪郡下諏訪町と諏訪市の境、高度約1,600mの地にある。緩傾斜の原に小川が流れ、御射山講武之跡の石碑が建つ。2010年には、8月27日の祭の前日から準備が始まる。

前面に御神木の、エゾノコリンゴ(小梨)がある。先土器時代の石器群遺物が出土する。さらに、南北370m×東西270mの積敷遺構である階段状地形がある。薙鎌が発掘される。ミサヤマは、ミ(敬語)+サ(矢)で、神の狩猟地である。平安末の文治年間(1185-1189)編纂の『袖中抄』にはすでに、「穂屋のすすき」が歌われる。巻狩、小笠懸、草鹿、みち(競馬)が行われた(長野県下諏訪町教育委員会, 1989)。

祭の8月27日には、朝早くから来て準備される。日本学生航空連盟や上桑原牧野農業協同組合などと書かれた幡が立てられる。祭りは10時から1時間ほど行われ、下社の神職、市の要人、観光協会などが玉串奉奠する。神事後、ブルーシートの上で数十人が直会をする。

本来の祭祀は、八島湿原での水源の祭りといわれる。諏訪大社では年に4回の御狩神事があり、9月27日にも行われる。穂屋は宿営地で、ススキと榊を供える。東侯の往復にも、穂屋を通る。武士は観音沢から上がってきた。祭りは稲作とも関連するといわれる。奏される笛の曲は、鶏鳴楽といい、諏訪に限らず天岩戸の前でも奏されるものであるが、鳥は風神に深くかかわる。

2. 八尾のおわら風の盆

富山では、「おわら風の盆」という行事が続けられている。先に、明治20年頃からの新聞報道にもとづき、当時のおわら風の盆の状況が明らかにされている(荒木良一, 2010, 2011)。

初秋の祭り

おわら風の盆がおこなわれる9月1日から3日は、8月8日の立秋から1月足らず、初秋にあたる。富山県では主にその前の6月には夏^{なごし}越の祓があり、さらに7月にかけて除蝗祭が行われる。一方、秋祭りが本格的に始まるのは9月中旬以降である。9月初旬は稲の稔を前にした重要な時期でもあり、年間でも祭りの少ない時期にあたる。

風祭は、神社本庁の平成「祭」データ(平成7年)から集計すると、富山と隣接する新潟・長野・岐阜・石川を含めた5県では428(内富山6)件である。風祭は8月16日から9月1日に多いが、とくに8月25日に32件、さらに9月1日に47件を数える。おわら風の盆の時期に、風祭は富山県周辺で、そのピークを迎える。

諏訪の祭りと風の盆

風祭は諏訪に深く関わるが、諏訪では風祭がない。風祭の多い期間中の8月27日には、諏訪で御射山祭りが行われる。諏訪大社の多数の祭りの中で、最も重要とされる祭りである。富山県では45件の諏訪祭りがあるが、8月27日には内27件が行われる。多くの風祭はこの御射山祭に結びついていると考えられ、また諏訪祭は風祭の別称とみることができる。なお諏訪祭りは旧富山市で19件、氷見市で13件がみられるが、その本社の名称のうち諏訪社は3社のみで、さまざまな神社で行われている。

風祭とかかわる御射山祭の本祭は、旧暦七月二十七日である。おわら風の盆は、旧暦七月十五日の盂蘭盆とは別とされる。地方により観音縁日の旧暦七月十七日は観音盆、とくに旧暦七月二十四日は地藏盆、さらに大日如来縁日の旧暦七月二十八日は大日盆とされる。その中にあり、風祭の旧暦七月二十七日は風の盆にあたる。

旧暦と新暦の祭日

おわら風の盆は、9月1日から3日に行われる。明治年間には二百十日は、1900年までは8月31日か9月1日、1900年以降は9月1日か9月2日であった。風祭の旧暦七月二十七日は平均で9月4日にあたる。

先に指摘されているように、祭が風の盆とよばれぬ年もあるが、このような年は、旧暦七月二十七日は、9月1日から3日の期間から大きくはずれていた。とくに明治20年には、9月2日は盂蘭盆にあたり、この9月1日から3日の祭りは、それに伴い後ろにずらして行なわれたと考えられる。

おわらと八尾

おわら風の盆の名は、とくにおわらと冠している。このおわらには、八尾にとどまらず、八尾をとりまく風土やアイデンティティーに相当するものを含むことが考えられる。

八尾の町の南には、茗ヶ原、笹原、そして小原の丘陵がある。さらに飛騨側にも「原」地名が散在し、丘陵部一帯には多くの「原」が広がる。原は信州など内陸山地に多いが、田畑ではなく、また山林でもなく、家畜の飼育や狩猟がおこなわれ、「牧」と呼ばれるところも多い。諏訪の御射山祭りは、はらやま祭りとも呼ばれ、御射山社のある一帯が原山である。このように原は祭祀の場として認識される地であった。

八尾の町から見た原も同様と考えられ、ここからおわら、あるいは小原には、捨象することができない意味が含まれることになったかもしれない。さらに原は、御射山祭り、諏訪祭り、風祭とも深いつながりがあると考えられる。

おわらと諏訪

伝承ではおわらは八尾の町建許可書取戻しの一件に由来しているといわれる。町建が寛永十二(1635)年、この件はその4代目孫にあたる、元禄の頃のことである。取戻し先は野積村水口であれば、八尾の町から野積川を遡った丘陵地帯にあたる。この水口と同名の、滋賀県甲賀市の水口町は、風祭や諏訪にまつわる甲賀三郎伝承の発祥の地である。八尾の町の中央部にある諏訪町は野積村水口とともに、諏訪にかかわるかもしれない。

この水口の名は水源を思わせるが、水源の地は祭祀の対象となることが多い。また水窪のように水はみさと読まれる。風祭の御射山は水山となるが、諏訪の御射山祭りは、上社は富士見町原村、下社は八島湿原など、水源の地での祭祀である。同様に水口にちなむのであれば、響きの類似した諏訪の「みしゃぐじ」とつながると考えられる。

諏訪の神器の薙鎌の流れを組むと考えられる鎌打神事が、かつて婦中町麦島で行われていたといわれ

る。また肯構泉達録(1815年)中の甲賀三郎伝承は、富山市諏訪川原の諏訪神社にまつわるが、その起源は神道集(1350年頃)に遡る。

不吹堂と風宮

おわら風の盆は、周辺の祭りとのかかわりが不明なところが多い。ただし富山には不吹堂などと呼ばれる、風祭が行われる多くの祠堂がある。砺波平野南部の八乙女山は、数々の風にまつわる伝承をもつ。旧城端町是安の風宮不吹堂、級長戸辺神社も藩政期に建立された。さらに八乙女山麓の多くの不吹堂は、18世紀末から19世紀初めにかけて建立された。

大沢野町直坂の級長戸辺神社は、明治20(1887)年から3年間の甚だしい風害の後、明治23(1890)年9月に是安より分霊されたといわれる。さらに明治34(1901)年には、この直坂から八尾町の黒瀬谷大字外面谷村、堀田村、上谷村に分霊された。現在も外堀に風の宮があるほか、大岩に風堂石碑、掛畑に不吹堂跡、宮腰に風堂跡などが残る。

とくに久婦須川の両岸には、不吹堂、風堂、風宮などとよばれる風の祠堂が多数分布している。その一つの掛畑には、300余年前に上流の小原村の下に堰を設けて、用水が引かれたとされる(八尾町史編纂委員会、1967)。これは町建許可書取戻しの一件と、およそ同時代である。黒瀬谷の風堂などの祠堂は、用水の分水の地などにも祀られて水とのかかわりが深い。同様のことが近世初期にも行われたのであれば、小原の地が水源の地として、祭祀の対象の地ということになる。その場合、おわらに小原が含まれれば、原に加えて水の性格もかわることが考えられる。

3. 越後の風の三郎さん

佐渡や越後に祀られる風神像は、近世や近代のものである。また風神が単独で祀られているため、二十八部衆に伴う風神・雷神ではなく、地元の風の神に、風神・雷神の様式を導入したように考えられる。

佐渡の風神

佐渡各地に多くの風祭が伝わり、また風切鎌なども奉納されていた(田上善夫、2009)。石造の風神も祀られ、真野の小立に風袋をになう石神がある。また新穂の生椿の石神(風の三郎)が、新穂資料館に収蔵されている。畑野から小倉峠を越えて松ヶ崎に向かう路にも、石神があるといわれる。

風の三郎は、甲賀三郎あるいは新羅三郎、源義光

とのかかわりが考えられる。新羅三郎の兄の加茂次郎が國中平野中央南側、畑野の賀茂神社に祀られる。この加茂次郎、源義綱は、天仁二(1109)年に義忠殺害の嫌疑をかけられる。甲賀三郎説話にまつわる甲賀大岡寺で出家するが、佐渡に流され、天承二(1132)年に追討を受けて自害する。また新穂の大野では、風除けの真言を唱えるという。

中越の風神像

中越では、信濃川支流の洩海川の流域、とくにその上流部の現十日町市である松代町や松之山町で、多くの風神像がみられる。松之山町は盆地状で、耕地は標高180mから500mほどにあり、多くの支流や丘陵で隔てられた、起伏の多い原状の地形をしている。

松之山町東部の東川に、^{まつお}松亭大権現が鎮座する。風神はその背後の山上に祀られており、風の三郎さまとよばれている。現在は祭りをしておらず、草叢のために近づくのは困難とのことである。

東川に近い上^{かみえびいけ}鰈池に、十二社神社が鎮座する。その南側の尾根を越えると、信濃川流域の中魚沼郡津南町となる。集落の裏手にある尾根の上部には、比較的一定の高度の道が続く。その尾根上の小起伏ごとに、石碑や石仏が建てられている。その1つに、鬼門塚があり、隣接して高さ1m弱の細長い卵型をした石碑が建てられている。平成22年には倒れていたが、年始めの大雪のためと考えられている。前面には、奉風天大明王、と刻まれるが、風の三郎さんとよばれている。側面には、明治23(1890)年寅年と刻まれる。今は風の三郎さんの祭りをしていないという。

松之山町北部の水梨に、小谷白山社が鎮座する。境内の裏手山側には、秋葉社と刻まれた石碑などが並ぶ。ただし、風神にかんして刻まれたものはみられない。

松之山町の北側に隣接する松代町の室野では、洩海川から比高30mほどの起伏の上に、松亭神社が鎮座する。その石段上にある本殿に向かって、右側の境内に、風神石像が祀られている。高さ数十cmほどで、風袋を頭の後ろにまわし、衣服を風になびかせたレリーフである。風神の手の指は、5本ある。側面の刻字から、建立は明治16(1883)年6月28日である。

IV 風の祭祀と天・地

1. 京都の風神と浄土

京都三十三間堂

風神あるいは風神に擬した仁王が、山中に祀られていた。風神の彫像の最古のものは、京都の三十三間堂内のものといわれる。三十三間堂には、千手観音坐像と千体の千手観音立像がある。その前に並ぶ二十八部衆は、千手観音と法を護る役割がある。さらに二十八部衆の両脇に、風神と雷神が並ぶ。

向かって右端に位置する雷神は、手の指は右2本、左3本で、足の指は2本ずつである。雷神はインドのヴァルナに由来し、雨と水の神から天候、さらに雷の神となった。左端の風神は、インドのヴァユに由来し、2頭の馬に曳かれ、幸せをもたらす神とされる。この風神像は、インドや中国とは様式が異なる。手の指は4本、足の指は2本に分かれ、爪がある。

風神・雷神は、7世紀唐代の千手陀羅尼經の中に登場するという。風神・雷神は二十八部衆の後に加えられたといわれ、ひときわダイナミックであり、迫力を示している。なお造像には堪慶(1173-1256年)が深くかかわったといわれる。

なお二十八部衆の1つに、迦楼羅王像がある。神鳥に由来し、天狗や風とのかかわりが考えられている。迦楼羅は、横笛を吹く姿で、足は杳をはき指は不明であるが、手の指は風神・雷神とは異なり、5本ある。

風神と観音信仰

わが国最古の風神・雷神像のある三十三間堂は、後白河上皇(1158-1179)が建立した蓮華王院の本堂である。後白河上皇は保元の乱後、法住寺殿で院政を行い、熊野本宮に34度、新宮・那智に15度参詣した。熊野参籠の折に、千手観音を感応したといわれる。

観自在菩薩はインドのシヴァに由来するが、シヴァの前身は暴風雨神である。観自在菩薩は、中国では3世紀の阿弥陀経や無量寿経にみられるという。日本では白鳳期に多くなった。千手観音信仰は、後白河上皇時代に最盛期を迎える。さらに観音を護る二十八部衆が、絵画や彫像に具現されるのは、蓮華王院創建後で、鎌倉中期以降に各地に急増する。

2. 甲賀三郎と通底

近江の甲賀

風の三郎と名前が類似する甲賀三郎は、滋賀県の甲賀に由来する説話である。甲賀の水口は、東海道の五十次水口宿で、四十九次土山宿の南は鈴鹿峠となる。水口宿の背後に、古城山、大岡山(282.9m)がそびえる。天正十三(1585)年には水口岡山城があり、天和二(1682)年より水口藩が置かれた。享保年間に大岡寺の寂堂法印が、この山頂に阿伽之宮という小祠を祀り、4月17日に柴燈護摩が焚かれる。山腹には奥村大神・諏訪大神の石碑も建てられている。

この南麓にある龍王山大岡寺は、付近一帯の総寺である。観音が本堂に祀られ、岡観音と呼ばれる。白鳳十四(686)年、行基が大岡山山頂に十一面千手観世音を安置したことに始まるといわれる。龍王山の山号のように、本堂の脇には放生池があり、池の中の島に諏訪社が祀られる。残された瓦には、織田・豊臣の紋がつけられ、望月氏のように九曜の星に似た紋もみられる。

大岡寺は甲賀三郎説話に登場するが、新羅三郎、源義光(1045-1127)の兄の加茂次郎こと源義綱は、大岡寺にかかわる。義家の子義忠殺害の疑いで、義綱の子の義明が自害し、義綱は東国に出奔しようとして、無実の罪をはらすためこの大岡寺で出家するが、佐渡に配流される(甲南町史編纂委員会、1967)。佐渡で加茂次郎を祀ったのが、後述の賀茂神社である。

甲賀望月

甲賀の名は、鹿深臣に由来するといわれ、かふか、こうか、ともいわれる。天智七(668)年に、軍事交通の面から甲賀牧が設置される。甲賀牧は、土山町頓宮、信楽町牧であると伝わる(土山町史編纂委員会、1961)。

水口から南に5kmの甲南は、望月の地である。清和源氏の流れの望月氏が、応永三十一(1424)年に、この地の塩野に、諏訪神社を再興する。またこのころ塩野には、修験山伏が土着した。文明十二(1489)年には、柑子に望月城が築かれる(甲南町史編纂委員会、1967)。また水口の南西6kmの飯道山(高度664m)は、修験の山である。飯道山北麓の山中では、7月末に富士浅間のお籠りがされる。また付近では、風籠りが8月1日、9月1日に行われる。土山町では風没祭といわれる。なお伊勢講・多賀講・愛宕講の代3が選ばれ、風まいりともよばれる(奥村晃代、2009)。

若狭の高懸山

甲賀三郎伝承には、若狭がかかわる。福井県三方上中郡若狭町、小浜湾から10km内陸の、北川の南に鎮座する、宝鏡社が舞台である。宝鏡権現、カフカ山といわれ、鬼神が住み、源頼光が権現に祈り、願成就して社を建立したといわれる(遠敷郡教育会、1922)。伊賀誌甲賀家伝では、諏訪の左衛門源重頼の三兄弟が、勅を奉り高懸山の強賊を平らげる。望月三郎兼家は深谷に落とされるが、九死に一生を得て帰り、兄の領所を得、さらに甲賀と伊賀半国を得る。羅山文集では、水口の大岡観音堂の縁起で、甲賀三郎の三兄弟が高懸山の窟で、鬼輪王を射殺する。その後に兼家を陥とし、兼家は蛇となる。その窟は、信州木葱松原に通じる(福井県遠敷郡三宅村、1919)。

宝鏡神社は、神谷の上方、山中の標高290m付近にある。10月15日が祭りである。ふだんは山麓の社に、2ヶ月毎の当番で参る。また山麓の集落の端にある小祠には、山祇の神が祀られる。その脇に弓矢が建てられているが、その意味は不明という。また甲賀三郎の伝承があるが、穴は見つからなかったという。

各地の伝承

風の三郎説話が流布したころ、上方に諏訪信仰を広めた拠点京都にあったといわれる。京都市の烏丸三条の六角堂にほど近い、東洞院通り蛸薬師に、御射山公園が残る。御射山は、諏訪の神の故地で、重要な神事が行われるが、現在は京都の御射山に諏訪社はない。また御射山から約1km南方の、烏丸五条の西に、上諏訪町がある。こちらにも現在は、諏訪社はない。

若狭小浜の高懸山の5kmほどの地で、奈良東大寺二月堂に向けて、お水送りされる。お水取りでの籠松明は、青竹の先に松の割木を蔓でしばり、杉の葉をかぶせ、檜の薄板で籠状に編み上げたもので、その蔓はクツワフジという葛で、甲賀の信楽町から納める。また二月堂には、飯道神が鎮守として祀られる(米田実、2009)。

茨城県多賀郡諏訪村の水穴は、諏訪にかようという。鹿児島県始良郡東国分村の諏訪神社にも、甲賀三郎に似た伝承がある(水口町史編纂委員会、1959)。

3. 伊吹の弥三郎と飛翔

伊吹の弥三郎

風の三郎の名に似た弥三郎婆の伝承が、佐渡や越

後に伝わる。滋賀県伊吹山には、風にかかわる弥三郎が伝わる。伊吹山に祀られる伊吹大明神は、本地は八岐大蛇とされる。伊吹の弥三郎は、山頂近くの井の口に祀られているという。

この伊吹山の弥三郎と、近江の大野木の姫との間に、伊吹童子が生まれる。伊吹童子は捨てられて、比叡山を経て大江山へ至る。大江山の酒呑童子の名は、この捨てられた童子に由来するとされる。

この弥三郎には多くの話に関連し、以下のように時代により変わる。まず、酒呑童子の話は、1000年前後に成立したといわれる。吾妻鏡には、近江柏原庄地頭、柏原弥三郎がある。伊吹の弥三郎は、1201年に討伐される。伊吹童子と弥三郎は、1407年の三国伝記に現れる。さらに、元和七（1621）年十一月二十一日の大風は、弥三郎風といわれた。神道集は、南北朝時代（1336-1392）の中期の成立とされるが、それに続く時代に、弥三郎も作られたとみることができる。ただし柏原弥三郎以前から、伊吹の弥三郎は伝わっていたともいわれる。

弥三郎と風

さまざまな説話が交錯するが、この地の神には風や水の性格があり、弥三郎という名の者がいた。そこで大風が怪異な存在と結びつけられ、弥三郎風の名につながったと考えられる。北陸道に近い伊吹であれば、日本海側につながる弥三郎婆と風の伝承との関連も考えられる。また伊吹三郎は大江山の酒呑童子に結びつけられたが、酒呑童子を退治した源頼光と大江山は、高懸山にも結びつけられている。

なお、越中の甲賀三郎伝承では、伊吹のかもひこ梶彦を討つ。梶彦は、伊吹の弥三郎や、また賀茂次郎につながるかもしれない。

甲斐の弥三郎

山梨の昇仙峡の弥三郎岳に、弥三郎権現が祀られる。弥三郎は羅漢寺の寺男で酒造りの名人であった。大酒飲みであったが、禁酒を誓って天狗となり去ったという。弥三郎岳の15km北西の八ヶ岳山麓は、風の三郎の祀られる地である。また天狗は風を表すため、この弥三郎も風の三郎につながる可能性がある。

越後の弥三郎婆

また、弥三郎婆の伝承は、およそ以下のである。弥三郎が鬼の腕を切り落としたり、鬼は弥三郎の母であった。母は風と雲とともに弥彦山に飛び去って、後にそこに祀られた。この弥三郎婆は、弥彦山

（634m）の麓にある、弥彦神社地内の法光院に祀られる、妙多羅天女といわれる。

この弥三郎婆が弥彦山の岩穴に飛び去る話は、弥彦山から50km離れた、柏崎市の八石山（518m）西麓や、75km離れた安塚町牧野、さらに長野県下水内郡栄村、同小県郡武石村、山形県高畠町にもあるという。佐渡でも、老婆が猫と遊ぶうちに、化け猫の姿となって弥彦に飛び去った、といわれる。この伝承の要には弥彦山があり、新潟を中心にして、石川から青森の日本海側に分布している。

この弥彦の弥三郎の家には、富山の薬屋が毎年泊まるという話が、信濃川流域の栄村にある。また弥三郎の母である弥三郎婆が、大阪の豪商の鴻池から嫁をさらってくる話が、山古志、上越、十日町、山形県などにある。これらは日本海側の交流圏を示すとみられる。風の三郎の分布に似るが、風の三郎とのかかわりは不明である。なお弥彦神社では、二百十日に風祭が行われる。

大江山

伊吹童子に対して酒呑童子が棲むのが、大江山（832.5m）である。大江山には修験があり、洞窟などが残る。現在の車道終点、8合目（640m）に祀られる鬼嶽稲荷神社は、弘化年間（1844-47）に、上方から移されたものである。大江山の酒呑童子は、源頼光（948-1021）と四天王が退治したと伝わる（図10）。

出石神社

丹波・但馬には、各地に風祭がある。京都から綾部、福知山を経た北西に出石がある。慶長九（1604）年山頂の城を廃し、麓に但馬唯一の城である出石城が残る。

町は信州の小布施によく似ている。出石皿そばは、藩主が上田からもたらしたという。同様にこの付近の風祭は、信州とつながることが考えられる。

その北方に、但馬一宮の出石神社がある。新羅からの天日槍が、但馬を開発したといわれる。もたらされた八種の神宝に、比礼などがある。境内の裏手にある600坪の禁足地は古墳のようである（図11）。

遠野

盆の頃の雨風祭で、藁で大きな人形を作り、道のちまた岐に立てる。二百十日の雨風を北の方に祭る、と歌う（柳田国男、1976）という。遠野の北方25kmには早池峰（1917m）がそびえ、その名は疾風はやてに通じる。大同元（806）年、十一面観音を祀る。雨風

祭での白紙の幡は、神を憑依させるといわれる。

またこの地の伝承では、神隠しにあった娘が30年余り後の風の激しく吹く日に帰るが、またいなくなる。風が騒がしいと、きょうはサムトの婆が帰ってきそうという(柳田国男, 1976)。これは弥三郎婆の伝承に似る。

V 風の祭祀の展開と景観

1. 海上安全と風の祭祀

記紀などによれば、神功皇后は、近江国坂田郡の息長宿禰王と葛城高類媛(天日矛命の4代孫)の子の、息長帯比賣命である。仲哀天皇は前妃の大中姫との間に、籠坂皇子と忍熊皇子がいた。仲哀天皇二年、正月に神功皇后が正妃になり、二月に角鹿(敦賀)に行幸して筥飯宮を建てる。神功皇后は六月まで気比神宮奥宮の常宮に留まる。気比神宮は、伊奢沙別命、氣比大神と神功皇后などを祀る。伊奢沙別命の名は、天日矛が朝廷に献上した宝物の中の胆狭浅太刀に通じ、鉄やタタラ、風の神とも結びつく。気比神宮の総参祭は、氣比大神が常宮神社の天八百萬比咩神まで、宗像社のみあれ祭のように、白い布をなびかせ海を渡るが、風の様子を表している。

熊襲の反乱により、天皇は穴門(山口県豊浦郡)に向かい、神功皇后は日本海を経て豊浦宮(下関市長府宮の内の忌宮神社)に至る。仲哀天皇八年、五月に檀日宮(福岡市香椎)に移る。九月に熊襲でなく新羅を討つよう神功皇后に神託がおりるが、天皇は熊襲征伐に向かって敗れ、翌年二月に突然崩御する。秘かに遺骸を海路穴門豊浦宮に移し、もがりをする。神功皇后は、明らかにされた神々、神風の伊勢の撞賢木巖之御靈天疎向津媛命(天照大御神)、事代主神、表筒男・中筒男・底筒男の住吉三神を祀る。熊襲は服従し、三韓征伐にも成功し、筑紫に戻って応神天皇が生まれる。

翌年二月、穴門豊浦宮に移り、仲哀天皇の遺骸を納めて、海路大和を目指す。神功皇后は、武内宿禰と皇子を海人族のいる紀伊に向かわせ、日高(和歌山県日高郡)で再会後、小竹宮(和歌山県御坊市)に移る。山城で武内宿禰が忍熊皇子を打ち破り、神功皇后は応神を皇太子とし、大和国の磐余(奈良県桜井市)に都を造る。

神功皇后にまつわる息長の地は、名神高速道と北陸高速道の交わる米原 JCT 付近で、天野川が西流し、北東12kmに伊吹山がそびえている。伊吹は息

吹ともされる。神功皇后には、上述のように風にまつわる話題が多い。さらに播磨国風土記では、神功皇后が時化に見舞われて、その度に明石や淡路の港に避難する。福泊(姫路市)にも風待ちのため避難し、宇頭川(姫路市網干)では幼女を抱えた女が人柱となった。たつの市の御津にも、神功皇后の船が停泊した。さらに神功皇后は、十月に壱岐北部で風待ちをすると、北へ向かうのに良い風が吹いたことから風本と名付け、同年十二月三韓からの凱旋時に勝本と改めた。また爾爾神社の東風石は、三韓に出発するとき追い風が吹くようにと祈願すると、祈りが通じて割れた。錦浜は、壱岐を出発してから逆風に会い、船が遭難して壱岐に戻ったとき、濡れた錦の衣を干した。このとき七湊には七日間船を停めた。

壱岐郡に應神天皇を祀るのは18社、神功皇后は14社がある。壱岐では風祭は少ないが、勝本の聖母宮では、10月10日に風本祭が行われる。

2. 天下泰平と風の祭祀

神功皇后が筑紫から穴門豊浦に戻るとき、風治八幡神社の地で暴風雨となるが、太刀を献上して祈願すると風雨は治まったといわれる。同社は古くから伊田大神、海津見神を祀るが、元禄元(1688)年に、小笠原氏が風治八幡宮と改称した。この前の寛永九(1632)年に、豊前一国と豊後の一部30万石に、小笠原秀正の子らが入る。小倉は明治4(1871)年まで、中津は享保元(1716)年まで、杵築は寛永二十一(1645)年まで、小笠原氏が続いた。この地には海の神、神功皇后、小笠原氏がみられるが、小笠原氏のいた信濃は安曇野であり、この地とつながりがある。

宇佐でははじめ高魂神、後に宗像三神を祀る。天平三(731)年に應神天皇、さらに弘仁十四(823)年には神宮皇后も祀りようになる。神功皇后や應神天皇は、新羅への出兵にかかわり、異敵に備えて辺境また海辺に祀られたと考えられる。また宇佐は、南九州の隼人や北九州の磐井の間であって、ヤマトとのつながりが強いと考えられる。

またその放生会の蜷流しは、養老四(720)年の隼人との戦での霊を鎮めるためといわれる。八月十五日に、寄藻河の河口の和間浜を中心に、1)京都郡豊日別社と田川郡香春岳社の古宮八幡宮、2)上毛郡古表神社と下毛郡古表神社、3)宇佐宮、同神宮寺、六郷山、で行われる。香春古宮の鏡を豊日別

社が受け、海浜で宇佐宮に納める。また、行幸会は天平勝宝元(749)年に始まる。

宇佐八幡は、天平勝宝四(752)年東大寺大仏開眼後、広く知られるようになる。

宇佐付近で風止祭などが行われる。神社は、西国東、香々地町の別宮八幡社、九重町松木の八幡神社(宝八幡宮)など、養老年間(717~724)の創建が多い。天瀬町五馬市の金凝神社は、和銅三(710)年以前の創建である。また延喜十一(911)年には日田市武田の若宮神社、延久三(1071)年に久重町後野上の鉾神社、前津江村大野の老松天満社、応徳年間(1084~86)には日田市二串の天満社が創建される。高倉天皇の御代(1168-80)に日田市夜明の有王社が創建、建保四(1216)年に久重町栗野の牧口八幡社、寛元三(1245)年には玖珠町帆足の若八幡社が、鶴岡八幡より勧請される。久重町後野上の鉾神社は、阿蘇宮から鉾が飛来したといわれる。なお、下毛郡耶馬溪町宮園、雲八幡神社では、風鎮祭でお潮くみが行われる。

3. 風雨順調と風の祭祀

菟足神社では風祭で鉾を立て、諏訪でも御射山祭ではないが、御柱は矛のように立てられる。鎌立ては、草刈用薙鎌に模すが、矛のように立てられる。おわら風の盆は、八尾の町の周辺から持ち込まれたとされるが、特定の地というよりも山側一帯をさすように思われる。おわら節の多くの唄は、それらの集成を示しているようである。明治の一時期には、風祭に時期的に対応するときに、風の盆と呼ばれた。すなわち風祭であるが、それにとどまらず多様な性格をもっていた。

おわらは名のごとく原とのかかわりが認められ、さらに祭りの行われる地には水とのかかわりもみられた。こうしたいわば風土ともいえるさまざまな周辺、あるいは町も含めた一帯を、示しているのではないかと考えられる。

4. 風の祭祀の展開の背景

兵庫県豊岡市出石町の出石神社の神宝は、珠が2つ、浪振比礼、浪切比礼、風振比礼、風切比礼、奥津鏡、辺津鏡の八種であるという。海上の波風を鎮める祭具であり、そこには海神信仰や天日矛の信仰がある。古代に活躍する阿曇氏は海人族であり、筑前国糟屋郡阿曇郷にはじまり、中国や朝鮮半島との

交易をした。安曇は海人津見の転訛とされ、磐井の乱や白村江の戦いの後、九州から瀬戸内、近畿、三河国渥美郡、伊豆半島の熱海、山形県飽海郡に広がる。安曇野の奥穂高岳山頂の穂高神社は、穂高見命と綿津見命など海神を祀る。どこも風祭とかかわり、渥美付近には菟足神社、熱海付近には風祭地名があり、飽海付近の鶴岡市下川の善宝寺は、豊川稲荷、小田原の大雄山とならぶ曹洞宗の祈祷寺といわれる。

さらに、庄内平野周辺では風祭が多いが、風にちなむ地名がみられる。風平は、秋田県雄勝郡羽後町下仙道、同由利本荘市岩城内道川、山形県飽海郡遊佐町上蕨岡にある。庄内では日本海からの風に悩まされてきたが、クロマツ砂防林が整備されて影響が緩和された。さらに夏の乾燥した暖かい南西風は、低温を防ぎ、稲の葉をゆすって朝露を落とし、いもち病や紋枯れ病などの蔓延を防いで、宝の風と呼ばれた。

また上述の出石に近い大江山の山麓に元伊勢内宮がある。急な上りの参道の上に鎮座する。元伊勢伝承は、丹波だけでなく、大和、濃尾、伊勢、備中などにもある。天照皇大神は、倭を出て丹波で4年を過ごした後、20余ヶ所を経て54年後に伊勢へ鎮座する。

祭祀の創始がその地の景観とおよそ結びつく。ただし上述のように特定の祭祀と結びつく集団も大きく移動し、また祭祀自体の移動が伝承として残される場合もある。そのため後世における変容を含めて、祭祀と景観の関係を検討する必要がある。

5. 展開と景観のかかわり

景観の基本は、原、平、海、山のように、捉えられる。後には、山岳修験、祖先信仰などにより展開される。さらに、浄土、修験、里山、原山など、想念の地にも広がる。

海人族の安曇氏は、北九州の志賀島より、安心院、渥美、厚見、厚海、熱海に広がる。安曇野の穂高神社には、船をぶつけ合う神事もある。信府統記では、信濃国有明の里は、景行天皇十二年、泉(安曇)小太郎が、生坂村の山清路を切り崩して湖水を犀川に流して作ったと、いわれる。

海人は天皇家と婚姻関係にあり、その航海技術から重用され、また大膳職・内膳司についた。崇神朝の四道將軍、北陸使大彦命は阿倍氏、東海使武渟川別命は阿倍氏、西道(山陽)使吉備津彦命は吉備氏、

丹波（山陰）使丹波道主命は息長氏であるが、いずれも海人系といわれる。

風祭は、越後にみられるように、海岸でなく山麓に多い。ただし弥彦山付近では風祭はないため、弥三郎伝承とは時期が異なる。信濃でも、安曇野に多く、諏訪ではない。これらは、湿原での水田開拓期を示すように考えられる。新田開発により、それまでの狩猟民の社会に、海人族のような農耕技術を持つ者が加わる。諏訪の祭でも、狩猟社会と農耕社会の習合、田の神と山の神の習合があった。4・5世紀には、全国で農耕化が急速に進展したと考えられ、高千穂から筑紫、熊野から大和、諏訪から安曇野などでの習合があった。この頃の前方後円墳の急増も、祭祀の変化にかかわり、銅鐸もまた消滅した頃である。神社は山麓付近の緩斜面に多く鎮座するが、平と山の景観の接点でもある。

前方後円墳の分布は、4世紀末から5世紀前半の応神朝の頃、大和東南部から河内へ移る。5世紀後半の雄略朝の頃に、熊本、埼玉（稻荷山など）に現れる。6世紀前半の継体朝の頃に再び河内、また天竜川などに現れる（都出比呂志，2011）。神社の起源は縄文・弥生にあるが、古墳は神社に深くかかわる。古墳では祭祀が行われ、祭祀も変化した（岡谷公二，2009）。

渡来した農耕と在来の狩猟採集の社会で変動していたかもしれない。応神朝は古墳が変化する頃であり、祭祀にもかかわりが考えられる。ただし、宇佐八幡とは後世の習合である。

すなわち、風祭は水田開発が進められた頃に始まると考えられる。およそ新田開発は農業革命であり、開発を記念した祭である。町建ては都市革命であるので、後者はおわらの由来ともなる。初期には新田開発は湿原でおこなわれるために、必ずしも農耕民と狩猟民の利害は対立せず、海と山とで共同して、生産に関する天地の順調を祈る祭が求められたと考えられる。

具体的な風祭は、北九州での名称にみられるように、風止め、風除け、風鎮めなどがあり、海での航行安全にかかわるとみられる。山では、風祭にかかわる行事として、風の神送り、風塞ぎ、通せん坊、風神などがある。原の御射山祭では、天地の安寧が祈られる。海人は安曇に進出するにあたり、海や平と山や原の間をとりもった、と考えられる。

台風は、1701-1887年は9月上旬、1888-1995

年には9月上旬には少ない（水越允治，2010）。二百十日頃の強風災害は、経験的に認知されていたと考えられる。このことは、風祭が朝鮮や中国のものと異なることを意味している。海や平、山や原での祭祀を習合して、風祭とよんだことが考えられる。

天武朝に国家により創始された風祭も、天下の大祭として中央で斎行が意図されたことから、風祭の名称が用いられたと考えられる。ただし、道教的な解釈を含めたことから、それまでの風祭とはやや異なるものになった。近畿での風願濟祭の名称にも、後の影響がみられる。

また本居宣長によれば、大祓詞にある気吹戸主神は、伊弉諾尊が禊祓をして生まれた直毘神とされる。吐く息を守る神で、息に意識が加わると言葉となる（河野訓・水越允治・北畠能房，2010）。龍田の風祭では、級長津彦命が祀られることにより、祭祀の意味がやや異質になったことが考えられる。

風祭の祭神には、天照皇大神、大己貴命、日本武尊、健甕名方命、応神天皇が多くみられる。風神である級長津彦命よりも、これらの神々が勧請されたのも、その契機として、開発に伴う生産の安定が祈願されたためと考えられる。なお志那津彦命を祀った中臣金連は、壬申の乱（672年）後に殺害される。志那津彦命を天武朝で風神として祀るのは、中臣氏への鎮魂の意味が含まれるかもしれない。また元寇の際に、神風を吹かしたとして、とくに伊勢の風宮が別宮に昇格することになった。これは龍田風神の風が天地の安寧につながるものに対して、伊勢風宮が強風につながると認知されていたのかもしれない。

VI 風の祭祀の由来

1. 記紀神話の要素と風の祭祀

風祭には景観として異なる系統がみられる。祭祀に限らず、日本の文化的要素に異なるものがあることが指摘されている。

日本神話は 1) 天地開闢・国生み・天照、2) 出雲神話、3) 天孫降臨神話、4) 日向神話から構成される。1) は、男性的・年齢階梯制的な、水稻栽培＝漁労民文化である。2) は1) に近似し、農耕民文化を背景に、金属器文化的色彩が濃い。3) はアルタイ系遊牧民族文化につらなる。4) は隼人の伝承を基本とし、インドネシア的色彩が濃い（大林太良，1973）。

また、宇宙のはじめの説明は、1) ウマシアシカ

ビヒコジ(葦牙), 2) クニノトコタチ, 3) アメノミナカヌシ, の3グループに分かれる。1)は, わかい国土から足が生え出, 神が出現し, 低湿地の水稲耕作民が担う。2)は, 天地の間に巨人が出現し, 稲作民に近い海人が担う。3)は, 天の中心に創造神が生まれ, 皇室の祖先と司祭たちが担う。また, 高天原には北方系, アマテラスには南方系の要素がある。2)と3)は日本で接触混合した。古事記はアメノミナカヌシを中心におく天皇系, 後の日本書紀はクニノトコタチを重んずる藤原系で, 前者は天武天皇親政の, 後者は律令国家の意識を強調する(大林太良, 1973)。

上述のように神話などには, 農耕, 漁労, 遊牧, 海洋などの要素が混在している。それは景観にもとづいて生産が行なわれ, さらに人々の世界観に結びついていったと把握することができる。

2. 農耕・漁労と風の祭祀

こうした景観や生産につながる文化の型が, 以下のように指摘されている。1) 焼畑農耕文化, 2) 水稲耕作文化, 3) 漁労民文化, 4) 内陸アジア文化, がある。1)は, 縄文中期の中部高地の芋類, 後期・晩期の九州での穀物の焼畑耕作による。2)は華南から日本へ, また東南アジア・ポリネシアへ伝わった。3)は, 2)に近く, 海人が担う。4)は, 古墳時代中期の須恵器, 横穴式石室, 馬具などの文化である(大林太良, 1973)。

それぞれの文化が渡来した時期は, およそ1)から4)の順である。ただし新たなものに変化したわけではない。たとえば, 焼畑農耕文化と水稲耕作文化には, 季節的, 地域的, 家族的な影響で, 混合的な内容が常に考えられる。山村や森では前者の要素が濃い, 御嶽, 立石, 小祠など, 祭祀にもかかわる。

生産の中心にある水稲耕作文化は, 中国江南地方から, 紀元前千年紀後半に入ったとされる。この紀元前5世紀から紀元前4世紀後半の頃には, 呉越が滅亡し, 漢民族の南方への浸透に伴い, 非漢民族地域が動揺混乱していた。

漁労民文化は, 海人にかかわる。海神が, 山幸彦に風招を教え, 沖つ風, 辺つ風を起こす。天之日矛がもたらした, 風振るひれ, 風切るひれは, 先端にリボン様の布を付けた棒であり, 風を振起し, 風を止める(河野 訓, 2004)。先述の出石神社の神宝,

奥津鏡, 辺津鏡, 浪振比礼, 浪切比礼, 風振比礼, 風切比礼, 二つの珠, の渡来は, 水稲耕作文化よりもやや後である。これらは, 風にちなみ, 祭神の天之日矛命は, 海人の系統とみられている。愛知県で風祭の行われる菟足神社の祭神, 菟上宿禰命も同様と考えられる。また, 海人の系統の住吉神社は, 筒男命の住吉三神を祭神とする。この綿津見の三神は, 阿曇連の祖神である。

3. 内陸アジア文化と風の祭祀

神話の中で農耕・漁労より後のものとして, 内陸アジア的要素が指摘された。3~6世紀頃の東アジアには, およそ以下のような変化があった。

寒冷と乾燥により, 紀元300年から500年に農牧の境界線は200~400km南下した。1千万人近い五胡民族が移動潜住し, 華北, 揚子江流域, 朝鮮半島をはじめ, 日本へも渡来した。4世紀頃から, 北海道の後北・江別文化が, 道央・道東から下北・津軽半島, さらに岩手・宮城にまで広がるが, 寒冷期に本州北端の稲作農耕集団が, 壊滅的打撃を受けたためとみられる(鈴木秀夫, 2000)。

とくに5世紀には, 中国, 朝鮮で洪水が多く, 日本でも降水量は最大となった。427年には高句麗が鴨緑江流域から平壤に遷都し, 440年には北魏に敗れた他の騎馬民族が移動し, さらに北部九州の海岸地域に上陸して, 筑後川流域から熊本の菊池川流域に移動していった。5世紀には, 畿内で炉にかわりカマドが採用されるが, 朝鮮系渡来集団の影響と考えられる(鈴木秀夫, 2000)。

また4~7世紀には, 朝鮮半島に三国が鼎立したが, 以下のようなものである。中国での大乱で, 高句麗に漢人が避難した。また, 百済の不稔で, 飢民が新羅や高句麗に帰化した。新羅より, 天日槍が大和に植民して, 韓人の地を作る。大和より新羅に大軍が来襲し, 大和に人質を送るなどの緊張関係があるが, 一方大和より良医を求め, 大和に漢籍を送るなど, 親密な交流がある(金素雲, 1985)。

すなわち, 紀元前千年紀後半の水稲耕作文化の渡来の後, 千年紀前半には再び, 朝鮮半島を経由して内陸アジア文化が渡来するとともに, 日本列島の北部からも北方文化が南下してきた。いずれの場合にも, 不順な気候を背景として, 多くの人々の移動に伴うとみられる。

こうした新たな渡来文化と祭祀のつながりは明らか

かではないが、3世紀中から4世紀始に、三輪山山麓に大和・柳本古墳群が展開した。このころは、第10代崇神天皇からの王朝とされ、邪馬台国での宗教的なものから、より権力的となったと考えられている。次に413年から478年に倭の五王が南朝の宋などに9回以上遣使し、河内の古市古墳群や和泉の百舌鳥古墳群など、巨大な前方後円墳が作られた。この頃は、第15代応神天皇から第18代反正天皇の間で、都はしばしば難波や河内に置かれ、瀬戸内海を通じて、宋への遣使や朝鮮半島への外征が行なわれた。さらに、第26代継体天皇は、近江か越前から入り、507年に都を北河内に置き、南山城を経て、大和に都を置いた。

とくに5世紀には、河内など瀬戸内海に接して都が置かれることが多かったが、前述のようにこの頃には災害の増加に伴う民族移動が起きていたことから、半島・大陸といずれにせよ密接な関係があった。人々や文化の流入、その一方で軍事行動の必要は、祭祀に大きな影響を与えたと考えられる。

4. 社会的騒乱と風の祭祀

風の祭祀にかかわる諏訪の由来を伝える諏訪大明神畫詞は、正平十一／延文元(1356)年ころに成立、神道集は正平十三／延文三(1358)年ころに成立といわれる。

諏訪大明神畫詞の甲賀三郎

諏訪大明神畫詞は、主だった戦について、およそ以下のように記す。

- 1) 神功皇后が松浦に至り、天照大神の詔勅により、諏方・住吉の神が守護のために参する。龍宮の船頭安曇磯良丸、靈龜ののりて参向し、御船をこぐ。
- 2) 延暦二十(801)年、將軍坂上田村丸が安部高丸を追討のときに、諏訪と伊那の境の大田切で参向する。帰洛のときに佐久と諏方の境の大泊で諏訪明神が現れる。
- 3) 弘安二(1279)年、季夏の天、大龍雲に乗して西に向かう。六月二十五日、悪風俄に吹き来る。元朝常州に諏方大明神を勧請し祭礼す。
- 4) 元亨・正中・嘉暦年間(1321-1329)に、東夷蜂して奥州が騒乱する。明神、大龍の形を現して黒雲に駕して、良の方をさして向かう(信濃史料刊行会編, 1971)。

ここで1)の神功皇后では、海人である安曇野や、住吉の勢力とともに、半島への出兵にかかわる。海

人の出石神社の神宝が風にかかわるが、諏訪神も同様に感得されたことも考えられる。3)の弘安の役は、1)と同様に半島・大陸との戦であり、諏訪神は悪風をもたらしたことが示される。

一方、2)、4)は、東北の地での、9世紀、14世紀の戦にかかわる。2)で坂上田村麻呂に、一関市の達谷窟^{たつこくのいわや}で成敗された相手は、悪路王、赤頭、高丸などといわれ、朝廷軍を大敗させた阿弓流為^{あてるい}とも、前九年の役(1051-1062年)で、敗れた安倍貞任の子の高丸ともいわれる。4)の前に、津軽では文永五(1268)年にエゾの蜂起があり、蝦夷代官職の安藤氏が討たれた。安藤氏親族の内紛の間、元応二(1320)年に出羽のエゾが再蜂起した。紛争は元亨二(1322)年に、得宗家公文所の裁定にかけられたが治まらず、嘉暦三(1328)年になって和談が成立した。

このように諏訪神の奇特として、本朝擁護の神徳、異賊降伏の靈威、影響の冥応があったとされる。東北地方の東夷に対しても、半島や大陸と同様に、異民族とみなされている。

また、後三年の役(1083-1087)では諏訪もかわる。白川院の御宇、諏訪の大祝となった神太為仲は、八幡太郎義家の誘いで、反対を押しきり、前例のない上洛に向かう。しかし、美濃国筵田庄芝原での、新羅三郎義光の酒宴で双六の諍いから自害にいたる。京都の義家は驚き、義光の所存を尋ねんとする。為仲を継いだ弟の為継は3日で頓死、三男為次も7日で死す。四男為貞が立つ(信濃史料刊行会編, 1971)。

これは新羅三郎義光が、諏訪大祝の就任に介入したことを示している。大祝に対し新羅三郎は特異な存在であり、「風祝」にもかかわるかもしれない。

画詞には、御射山祭も記される。御射山御狩の因縁では、大明神が天竺波提国王の時に、七月二十七日から三十日まで、鹿野苑で狩をすると、美教という乱臣に害されようとする。明神は黄金の鈴を振るって、「狩る畜類は自欲のためでなく、仏道を成せしめんが為なり」と叫ぶと、梵天が四大天王に勅し、群党を誅す。三斎山の儀はそれをうつす。八叫鈴は神宝、四維の御柱は四王擁護のしるし、九の薙鎌は衆魔摧伏の利刃なり(信濃史料刊行会編, 1971)。

この画詞では、諏訪大明神は、半島・大陸や東北の外敵から鎮護し、御射山祭では畜生成仏をなすことが示されている。

神道集、信濃国鎮守諏訪大明神秋山祭事

画詞と同時期の神道集では、諏訪大明神に浄土が明瞭に反映される。桓武天皇のとき、奥州に悪事高丸がおり、また田村丸という震旦国の人があった。高祖の臣、朝広の兵で、稲瀬五郎田村丸であった。田村丸は高丸追討のため、清水に参る。伊那郡大宿で、梶葉水干殿が諏訪大明神として現れる。清水観音の計で將軍に随った。殺生の者を利益し、有情畜類を助けようと思う。深山の狩りを始める御縁日に、悪事高丸亡日の二十七日に祭る。このとき必ず大風大雨となる。死狂日で十悪情滅し、国を相動かす。また、畜類成仏の日で、諸天が感動驚く。藍摺水文水干殿は住吉大明神である。高丸娘の子孫は神主となる。田村丸は清水大堂、鞍馬、諏訪を建立する(信濃史料刊行会編, 1976a)。

神道集での諏訪大明神は、とくに画詞の2) 桓武朝の田村丸の、奥州の悪事高丸追討を加護する神として現れる。秋山祭、すなわち御射山祭は、高丸の霊を慰め、畜類成仏の日とされる。諏訪大明神として現れた梶葉水干殿とは、梶葉は風の象徴とされることから、諏訪の風神の性格を示している。

神道集 諏訪縁起事

さらに諏訪大明神は、甲賀三郎の成仏の相として描かれる。近江国甲賀郡に荒人神、諏訪大明神が顕れる。第三代安寧天皇五代孫の甲賀頼胤は、妻は大和国添上郡の春日権守娘である。坂東三道諸国、東三十三ヶ国惣追捕使となる。子の兄弟仲は不和で、三郎は東海道十五ヶ国、太郎は東山道八ヶ国、次郎は北陸道七ヶ国の惣追捕使となる。三郎は大和守を賜り、春日郡三笠山明神に参籠し、春日姫を甲賀に連れ帰る。

伊吹山上で七日巻狩し、八日目に上嶽に太鹿大王が現れ、三郎は登って行く間に姫が北東の方向に連れ去られる。姫をさがすと信濃の蓼科嶽の北峯の丑寅に、大きな楠と大きな人穴があった。降りて東の人穴を四五里、野原を十五、六里進むと大きな池があり、春日姫を連れ出した。姫が置き忘れた唐鏡を取りに三郎が再び人穴に入ると、次郎に縄を切り落とされた。次郎は春日姫を甲賀の館に連れ込み、三郎の一族二十余人を殺戮した。春日姫は、近江の湖北の戸蔵山で切られそうになるが助けられ、三笠山の奥にある神出山の岩屋に籠った。

三郎は地下の人穴を通して七十二の国を巡り、維縵国に辿り着き、維摩姫を妻とし、風習に従って毎

日鹿狩りをした。十三年と六ヶ月の年月が流れ、三郎は夢に春日姫を思い出す。鹿の生肝で作った千枚の餅をもらって、一日一枚ずつ食べながら帰ると、信濃国浅間嶽に出た。三郎は甲賀郡に戻り、笹岡の釈迦堂で、我身が蛇になった事を知る。僧達の昔語りを聞き、衣を脱ぐと人身に戻る。三郎は近江国鎮守の兵主大明神に導かれ、三笠山で春日姫と再会した。

二人は天早船で震旦国の南の平城国へ渡り、早那起梨の天子から神道の法を受け、天早車で信濃国蓼科嶽に着く。三郎は信濃国岡屋の上宮に、春日姫は下宮に、維摩姫も浅間大明神として顕れた。兵主大明神の仲裁で、次郎は若狭国田中明神となり、太郎は下野国宇都宮の示現太郎大明神、父甲賀権守は赤山大明神、母は日光権現として顕れた(信濃史料刊行会編, 1976b)。

この逐一の話の依拠するところは不明だが、地名や各国の山名は、一部を除いて実在のものが多い。神道集成立の直前にあたる前述4)に至るまで、奥州では半世紀以上にわたり騒乱が続いた。11世紀末にも奥州での騒乱が長年にわたり続いており、諏訪の縁起を設定するのに、2)と結びつけられた御射山祭とは異なり、この時代が深く結びついたものと考えられる。

5. 諏訪の神と風の祭祀

諏訪信仰の要素

風とは一見して無関係にもかかわらず、風の祭祀の要因であるのが蛇である。蛇は、1) 男根相似で生命の源、2) 毒による無敵の強さ、3) 脱皮による生命の更新、により祖先神として崇拝された。また蛇は水神とされ、鼠の天敵であることから田の神、穀物神の神格も付与される。蛇がトグロを巻くようすを見立てたものが鏡餅や円錐形の山で、円錐形堅穴住居の中は蛇の胎内とみなされて神聖な祭場とされた。蛇の形は一本棒で、直立すると似るため、樹木が尊崇された。とくに、蒲葵(ビロウ、クバ)は、御嶽の神木とされた。さらにヲロチは峯の神、蛇、蒲葵で、うねうねと続く山脈、ダイダラ坊、片方のみの巨大わらじ、注連縄も、イメージ巨大化の具体例である(吉野裕子, 1996)。

諏訪信仰でも、蛇は重要な構成要素である。蛇に見立てられるものとして、^{ほき} 榎(竹柏)、藤、梶がある。榎は熊野の神木であるが、諏訪でもコナギの原、

サナギの鈴、伊賀の佐那具、薙鎌など、ナギに通じるものが多い。梶は諏訪の神紋であり、先述のように風をも示している。

諏訪と武士

蛇と同様に風とのつながりは一見ないにもかかわらず、風の祭祀にかかわるのが、武士や戦である。武士たちに狩猟民的性格がある。鎌倉では鹿、猪などが食用とされ、いたるところで骨が見つかる。弘長元(1261)年の関東新政では、殺生禁断条文で魚網狩猟を禁ずるが、魚・鳥と異なり、鹿や猪にはふれない。北条氏は、諏訪社の狩猟神事にも積極的にかかわり、諏訪神は狩猟の神として信仰を集める。諏訪信仰は、足利政権とともに京都に入る。長崎の諏訪神社は、寛永二(1625)年に長崎奉行の肝煎りで勧請された(河野訓, 2004)。

御射山は御社山、御斎山、三才山、三斎山のように、表記される。御射山会では八ヶ岳南麓で巻狩りが、執権北条氏の下知のもとに行われる。鎌倉幕府は鷹狩り禁止令を出したが、諏訪明神に捧げるお贄狩りは例外とした。諸国の御家人は諏訪神社を勧請し、御贄狩りを続ける。また、下社旧御射山社は八島ヶ原に、御射山社も二上池の畔にあり、神の田圃とみため、稲の祭りでもある。御射山祭の午前中に風鎮祭が行われ、御旅所で行われる。松本市浅間温泉の御射神社の松明祭りは、旧七月二十七日に行われ、吉田の火祭りも諏訪信仰の祭りである(内山大介, 2007)。

御射山祭では、死者や畜類の慰霊の要素がみられる。御射山祭での鰻の放流は、放生会以前からの行事かもしれない。ただし行うのは、諏訪大社のみという。また諏訪の鹿食箸とは、肉食を免ずる以前に、この地域での薄の茎を青箸とする風習にもとづくかもしれない。

6. 甲賀三郎伝承と風の祭祀

前節までのように、およそ中世までの渡来の文化や社会の変化は、風の祭祀にも影響していたとみられる。それ以降には地域の文化や社会は変化するが、近世以降にも風の祭祀とのかかわりが継続する一方、変化がみられる。

甲賀三郎伝承の展開

南北朝期に成立した安居院神道集に、諏訪縁起として収められた甲賀三郎譚は、天正十三(1585)年の諏訪茅野氏本にみられる。三郎は、伊吹の岳にて

七日の巻狩を行う(信濃史料刊行会, 1972)。

七日は、御射山祭の期間にあたる。都から東北へ、古代・中世の東山道を経たつながりは、近世には北前船により北陸を経たつながりが重要となっていく。

正保三(1646)年には、諏訪本地兼家という甲賀三郎の浄瑠璃があった。伊賀国志からの甲賀伝で、醍醐天皇(在位897-930)のとき、望月太郎重家、諏訪次郎貞頼、望月三郎兼家が、若狭国の高懸山の兇賊を追討する。あるいは穴を通じ、信州コナギの松原へ抜ける。この大岡寺十一面観音堂の縁起は、諏訪明神との因縁が濃い(柳田国男, 2000a)。また、常陸多賀郡鮎河村諏訪の神仙堂は、諏訪の水穴に通じるという(柳田国男, 2000b)。

甲賀また常陸のものも、初出は大正5(1916)年とあるが、山崎千束の名があり、あるいは柳田による紹介かもしれない。また同年には、郷土研究3(11)に高島が、浅間山麓の真楽寺にある甲賀三郎の伝説を報告したという(柳田国男, 1968)。

安居院唱導教団による、安居院神道集の諏訪の縁起では、六十六国の山を巡るが、天正以降では京以東の十数国に減る。神道集以下の諏訪縁起と、近江系の大岡寺縁起に分かれる。三郎の名は、信州は頼方、浄瑠璃系は兼家となる。三郎は、頼方系ではたてしな山中の大きな人穴から入り、浅間山の西野大沼に出るが、兼家系では若狭高懸山から入り、浅間付近のなぎ(水松)の松原に出る(柳田国男, 1968)。

三郎の話は諏訪、甲賀以外にも伝わる。丹波北桑田郡知井の佐々里では、香加三郎兼家が丹波の八丁山に入り、八頭の大鹿を射殺した。大隅始良郡東国分村上井では、三郎が穴に戻り、老人に大きな猪と鉈とどた袋をもらい帰るが、袋を負っていると蜥蜴に見えるので、すてて人間に戻った(柳田国男, 1968)。

浅間のなぎの原は、六里ヶ原をさすという。なぎの水松とはイチイをさすので、マキ科あるいはイチイ科といわれる榔にもかかわる。鹿狩りの地でのつながりが考えられる。

風の三郎とのかかわり

昭和11(1936)年の高志路5(6)では、新潟県東蒲原郡太田村では旧六月二十七日に風の三郎の祭をするが、風の神を新羅三郎義光だという者がいる(民俗学研究所, 1955)。この日は御射山祭の日でもある。

三郎は、吉野裕子によれば、風の死、追放を意味

するという。諏訪明神は風の神で、諏訪明神の化身は甲賀三郎である。風にも甲賀三郎にも穴がかかわり、分布がおよそ一致する。風の三郎と書かれた石碑は、例外なく新しい(鳥越皓之, 2010)。

南北朝期の神道集などに登場するのは、実名あるいはそれを模した名の者であり、風の三郎のように^{あだな}綽名あるいは架空の名はあらわれない。そのため、風の三郎の名は、後世での身近な呼び方と考えられる。

神道集などでは、追討の対象は安部高丸などと呼ばれた。諏訪は、大和から東国、蝦夷に向かう中継の地としてあらわれ、さらにその先には諏訪の神の縁戚とされる宇都宮などがある。都の西方では、半島や大陸、また熊襲や隼人の勢力に対して鎮護にあたるのは、宇佐八幡である。宇佐は諏訪と同様に、前線あるいは中継の要地にあたる。風の祭祀は、この面から類似する、東と西の地域に多く分布する。諏訪の神は、神功皇后の出征の際に、八幡神に加えて住吉神と深くかかわる。安曇野に示されるように、諏訪は海人族とのかかわりがあり、また住吉神とは風とのかかわりがある。

三郎の妻の春日姫のように、三郎には春日の地がよく出てくる。春日大社では鹿は神の使いであり、三郎と同様に鹿が重要である。八幡は東大寺と深くかかわるが、諏訪の春日大社さらには鹿島神宮、藤原氏ないしは興福寺とのかかわりを示すかもしれない。

諏訪明神は坂上田村麻呂を護るが、御射山祭では討たれた高丸の霊が追悼される。畜類成仏とともに慰霊の要素が大きい。御射山祭と風祭とのかかわりは、風の与える心象が大きい。とくに木々を揺り動かし、倒すほどの強風であれば、そこに死者の嘆きや怒りを感じることになる。御射山祭と風祭の間には、鎮めについての深いつながりがある。

御射山祭は諏訪大明神の祭であり、諏訪大明神は甲賀三郎であり、諏訪大明神同様に東北に出かけるのが新羅三郎である。諏訪大明神の神格に風が含まれ、御射山祭とは風祭でもある。風の神は諏訪の神で、名は三郎であれば、風の神を風の三郎様のようによぶものと理解できる。なお、風の三郎から甲賀三郎を、さらに新羅三郎を考えることは可能である。

7. 風の祭祀の変化の背景

風神の起源地

近世以降に至る風の祭祀にはさまざまな要因がみられたが、その淵源はまた国外のものに照らして確めることができる。中国の楚辞の天問篇で、女岐は地母神であり、伯強は風の神である。宇宙の創造に続いて、女岐は風を媒介として懐胎し、人類を創造した(加納喜光, 1991)。

風神が、吐く息から生まれる伝承は、ニューギニアにもある。風神は海人が担い手で、海女の口笛を磯長息ともいう。草津の惣社神社に猿田彦命を祭るが、海人の祭る神である。一方、ギリヤークに風穴をふさぎに行く伝承があるが、本来狩猟生活者である。内陸では高山の頂や山中の風穴から噴出する(田代道弥, 1968)。また、アイヌの人々には、東風が止むような風の祭りがある(河野訓, 2004)。

風は相反する利害のあるものとして捉えられる。ここで、吐く息の風神は南方海洋的であるが、海上で順風を利用することに関心が高いためであろう。一方、穴からの吹き出す風神は北方山地的であるが、内陸では利用するよりも災害をもたらすものとして関心が高いためと考えられる。

記紀ではアマテラスとスサノオは、異なる系統とみられている。前者は日神であるのに対して、後者は風神とされ、出雲の健御名方神から諏訪にもかかわる。日神の祭りが稲作農耕の文化のものであれば、風神の祭りは稲作農耕以外の要素も含めた文化につながる。

とくに4世紀頃からは、倭は対外的、辺境的な勢力と緊張関係にあった。それらが収束に向かい、律令制に移行するにあたって、制度に通じた集団の力は強まる。古事記から日本書紀へと神話の内容が変化するのも、それを背景にしていると考えられる。一方、中央での統治機構の整備に対して、辺境の武力の維持は必要であり、諏訪の神や祭りはそれらとかわると考えられる。

風の祭祀の変化

ただしこうした多くの諸要因も、時代による生産や文化の変化に伴い、風の祭祀とのつながりは変化せざるを得ない。文化や社会はときどき大きく変化し、世界の捉え方も変わってきたことが、例えば以下のように指摘されている。1) はじめ、人々の自然観の基底をなすのは、動物や植物との一体化であり、トーテミズム、すなわちある社会の集団の祖先は特定の動物や植物の種と考えられた。2) 次に農耕社会では、万物に靈魂あるいは精霊が宿るというアニ

ミズムとなり、アニマは体を離れて遊離するとされた。3) さらに都市が作られるようになると、アニミズムを超えて、神々は人格化され個性化される。4) 現在につながる主要宗教が生まれるころには、神的なるもの、また宇宙の運動性や規則性が、内に生成発展の原理をもった生命ある有機的自然として捉えられ、神・人間・自然が一体的に包まれる。5) 近代科学が誕生すると、自然は機械で、機械は道具であるため、人間が自然を支配されると捉えられるが、そこには生命の欠落が指摘されている(伊藤俊太郎, 1996)。

こうした画期と観念の変化に類するものは、風の神や祭祀にもみられる。まとめると、およそ以下のようである。

1) まず稲作農耕以前において、生産は原や山にあり、焼畑農耕もなされていたとされる。銅鐸は祭具と考えられ、諏訪の御室の祭に名残を残すが、風祭は不明である。気候的には、それ以降より暖かかったと考えられる。

2) 低湿地に水田が開発されて稲作農耕が始められる。また隣接して海で漁労が行われる。銅矛は祭具であることも考えられる。気候的には寒冷で、紀元前5世紀より、江南からの人々や文化が移動していった。自然に精霊を感じるアニミズムを伴うのであれば、風も対象であり、風を起こし、風を鎮める神具も残される。

3) 古墳が各地に作られるようになり、応神朝では大陸や半島との関係が緊密になる。気候的には3世紀頃より寒冷で、人々や文化が半島を南下して渡来し、また北方の北海道の文化も南下した。後の武士の巻狩は、騎馬による戦闘を偲ばせる。風の祭祀での生贄には、狩猟の要素がかかわる。

4) 律令制の整備にともない、風の祭祀も整えられる。神社には鳥居が建てられるようになり、龍田のように神社型式で、風祭が行われる。気候的には、温暖となっていった。

また、北の蝦夷に対し、和銅二年(709年)、巨勢麻呂を陸奥鎮東将軍、佐伯石湯を征越後蝦夷将軍とする。一方南の隼人に対し、養老四(720)年に、大伴旅人を征隼人持節第将軍とする。諏訪は半島よりも北辺に近く、御射山祭に伝えられており、この頃も祭りの要素に含まれると考えられる。

5) 浄土思想や肉食の禁止が、広まるようになる。風祭の内容は、死者の慰霊や、畜類成仏の要素が明

瞭となる。気候的には寒冷化しており、半島・大陸、また辺境との緊張関係から、風の祭祀が重んじられたことも考えられる。

Ⅶ おわりに

祭や民間信仰、また社寺などは、地域内では深くかかわり、また時代的にも連続している。それはそれぞれが景観にもとづいており、同じ景観の範囲内では、相互に関連しあうためと考えられる。

風の神の中に、製鉄のタタラやフィゴにまつわる神もあげられている。ただし、その神々と風祭との関係は限られる。これは製鉄の場で風が神聖視されるにしても、景観との結びつきが小さいことが関係すると考えられる。景観とのつながりは、とくに祭名に明瞭であり、次に祭の時、祭の所に現れ、他の影響の入りやすい祭る神とのかかわりはそれに比べ小さい。とくに観念として風が捉えられるようなときには、その地の景観との結びつきは弱いものとなる。

本論では現在の風の祭祀の分布から、東北地方中部以南から九州地方中部以北を対象としている。ただし、アイヌの祭に、風を東西南北に分け、東風が暴れ、謝るものがあるという。また宮崎の椎葉村のカザバタは、穢れを祓うといわれ(河野訓, 2010)、風としても広い意味がある。本論で対象としなかった、本州最北部と北海道、また南九州と沖縄などの地域では、景観とのつながりは異なるものになることが考えられる。

また多くの風祭が由来する時代は、重要である。若狭で送水神事、山八神事が行われるが、遠敷明神は神仏習合の初期の神である。ヤマトタケルの頃に統一に向かい、国つ神、スサノオにつながる狩猟民を、天つ神、アマテラスにつながる農耕民が支配する、という論理があらわれる(梅原猛, 2002)。そうした社会の変化の地と、風の祭祀も結びついている。

さらに吾妻鏡でも、鎌倉で御射山祭中の七月三十日に、大祝諏訪盛重が風伯を祀らしめ、後には八朔の風籠になったという(中西正幸, 2007)。関東武士が狩猟を好むのは、縄文の遺民ゆえとされる(梅原猛, 2002)。御射山祭が安曇野で習合した風祭以前の姿を示し、鎌倉武士へと関係が受け継がれるなら、その後の風の祭祀にも大きく影響することになる。

また柱松は、柱と松明、すなわち柱と火により表現される祭りの総称とされる。柱松は盆および八月二十四日の地藏盆に集中する。盆の送り火や虫除け、地藏盆の愛宕山への献火、十五夜の豊作祈願で年占い、修験行事では原始的な護摩で、験競べである(小畑紘一, 2011)。柱松の分布は、北信、駿河、丹波・但馬、紀伊、周防灘周辺などである。これは、風祭の分布と類似しており、習合を含めて関係を検討する必要がある。

謝辞

各地で行った調査では、聞き取りなどを通じて多くの方々にお世話になりました。また本研究に関連して、多くの先生方から貴重な御教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

文献

荒木良一(2010): 明治の新聞に描かれた「おわら」「風の盆」(上). 越中おわらを語る会『おわら通信(その一)』, 18-24.

荒木良一(2011): 明治の新聞に描かれた「おわら」「風の盆」(下). 越中おわらを語る会『おわら通信(その二)』, 27-34.

伊藤俊太郎(1996): 文明の転換と自然観の変貌. 梅原猛編『新たな文明の創造』朝倉書店, 12-24.

内山大介(2007): 御射山祭りの伝播とその性格―「送る」祭祀としての御射山祭り―(上). 信濃(信濃史学会), 59, 259-282.

梅原 猛(2002): 『海人と天皇(下)』小学館, 445p. (初出1989-1990).

王司まちづくりの会(2000): 復元された竹製風車ぐるま. 王司まちづくりの会編『王司の文化史跡と遺産』45-46.

大林太良(1973): 『日本神話の起源』角川書店, 313p.

岡谷公二(2009): 『原始の神社を求めて』平凡社, 283p.

奥村晃代(2009): 籠りと祈願. 甲賀市史編纂委員会『甲賀市史第6巻民俗・建築・石造文化財』甲賀市, 89-90.

遠敷郡教育会(1922): 『若狭遠敷郡誌』764頁.

小畑紘一(2011): 柱松と修験道. 第32回日本山岳修験学会聖護院学術大会, 11p.

加納喜光(1991): 風の神話学―「天問」女岐章の

解釈―. 『竹田晃先生退官記念東アジア文化論叢』汲古書院, 3-15.

金 素雲(1985): 『三韓昔がたり』講談社, 286p. (初出: 鐵甚平『三韓昔がたり』学習社, 1942年)

河野 訓(2004): 『風の神』. 伊勢神宮崇敬会講演録11, 伊勢神宮崇敬会, 54p.

河野 訓(2010): 風の神と信仰. 神道文化会編『自然と神道文化3―水・風・鉄』弘文堂, 83-115.

河野 訓・水越允治・北畠能房(2010): 座談会: 風と神道文化. 神道文化会編『自然と神道文化3―水・風・鉄』弘文堂, 147-163.

甲南町史編纂委員会(1967): 『甲南町史』493頁.

信濃史料刊行会(1971): 諏訪大明神畫詞. 『新編信濃史料叢書第三卷』信濃史料刊行会, 63-97.

信濃史料刊行会(1972): 諏訪大明神御本地縁起. 『新編信濃史料叢書第七卷』59-78.

信濃史料刊行会(1976a): 神道集信濃国鎮守諏訪大明神秋山祭事. 『新編信濃史料叢書第十三卷』信濃史料刊行会, 245-248.

信濃史料刊行会(1976b): 神道集諏訪縁起事. 『新編信濃史料叢書第十三卷』信濃史料刊行会, 281-307.

鈴木秀夫(2000): 『気候変化と歴史』大明堂, 474p.

田上善夫(2009): 佐渡と越後の風の祭礼. 日本佐渡学, 11, 41-50.

田上善夫(2010): 風の祭祀の由来と変容. 富山大学人間発達科学部紀要, 5(1), 169-194.

田代道弥(1968): 『風神つのととり考』祭風洞書屋, 45p.

都出比呂志(2011): 『古代国家はいつ成立したか』岩波書店, 202p.

土山町史編纂委員会(1961): 『土山町史』土山町, 627頁.

鳥越皓之(2010): 風の神と風の三郎. 生活文化, 31-41.

中澤克昭(2000): 日本中世の肉食をめぐる信仰と政治―諏訪信仰の展開と武家政権―. 食文化助成研究の報告(味の素食の文化センター), 10, 65-72.

中西正幸(2007): 『神宮祭祀の研究』国書刊行会, 717p.

長野県下諏訪町教育委員会(1989): 『旧御射山遺跡―長野県諏訪郡下諏訪町旧御射山遺跡発掘調査

- 報告書』16p.
- 沼田順義(1969)：級長戸風. 鷲尾順敬編『日本思想闘争史料第7巻』名著刊行会, 277-498. (初出, 文政十三(1830)年).
- 福井県遠敷郡三宅村(1919)：『三宅村史』220頁.
+ 56頁.
- 前川光徳(1987)：員光八幡宮の風鎮祭. 王司郷土文化研究会編『ふるさとおうじ』, 72-73.
- 水越允治(2010)：風で語る日本の気候. 神道文化会編『自然と神道文化3-水・風・鉄』弘文堂, 117-146.
- 水口町史編纂委員会(1959)：『水口町史下巻』628p.
- 民俗学研究所(1955)：『改訂総合日本民俗語彙第一巻』平凡社, 477p.
- 八尾町史編纂委員会(1967)：『八尾町史』八尾町, 921p.
- 柳田国男(1968)：甲賀三郎の物語. 『定本柳田國男集第7巻』筑摩書房, p.36. (初出：文学, 8(10), 1940年)
- 柳田国男(1976)：『遠野物語・山の人生』岩波書店, 335p. (初出, 1910年).
- 柳田国男(2000a)：甲賀三郎. 『柳田國男全集第25巻』筑摩書房, 21-25. (初出：郷土研究, 3(10), 1916年)
- 柳田国男(2000b)：常陸の甲賀三郎. 『柳田國男全集第25巻』筑摩書房, p.36. (初出：郷土研究, 3(12), 1916年)
- 湯川洋司(1992)：ムラの祭り. 下関市史編集委員会編『下関市史民俗編』, 447-494.
- 吉野裕子(1996)：日本の蛇信仰—「見立て」と巨木信仰. 山折哲雄・中西進編『宗教と文明』朝倉書店, 24-36.
- 米田 実(2009)：お水取りと信楽の一心講. 甲賀市史編纂委員会『甲賀市史第6巻民俗・建築・石造文化財』甲賀市, 91-92.

(2011年10月20日受付)

(2011年12月14日受理)